

読書のすゝめ

その 41

H 29 2 / 3

人生のせつなさといとおしさを・・・

3 年次生が自由登校に入り、なんとなく校舎が広く感じられますね。今日は『節分』。本来は各季節の始まりの日（立春・立夏・立秋・立冬）の前日で、「季節を分ける」ことも意味しますが、江戸時代以降は特に立春（毎年2月4日ごろ）の前日を指すようです。『春立つ今日の風やとくらむ』と紀貫之が歌に詠みましたが、吹く風や陽差しのささやか変化に春の訪れが感じられる頃になってきますね。1・2 年次生も学年末考査を控えて、気持ちを引き締まる時ですが、一日のほんの少しの時間でも『本』を通して自分を、人生を見つめてみませんか。



『とりつくしま』東直子（ちくま文庫）モノになつて、世界を見つめ直したら、世界がとても新鮮に見えてきました。つくづく今、生きてきるといふことは、まったく奇跡的で、それだけでひどくいとおしいことなどだ、と痛感しました。【著者からのコメント】

11の独立した短編集。『とりつく』という怨霊や悪霊のイメージですが、この本はこの世に未練を残した死者が、身の回りのものに取り憑いて静かに見守る物語。最初的一篇、「ロージン」がいきなりいい。愛する息子の大事な試合。その時を見守りたいからと、息子の手の平で遊ぶロージンにとりつくことを決めた母。ロージンの粉が空に舞って、母だったものの意識も静かに霧消してゆく…。相手を驚かさないうに、どこかから見守っている、そして私たちは見守られている。そう信じたい人のため、見守ることが出来ると信じていきたい人のためのそんな数々のストーリーなのかも知れない。

私の考える「とりつくしま」
 【①】は、【②】
 【③】
 読後、最初に思い浮かんだ顔は、あなたでした。
 ①にあなただの名前、②にとりつくモノ、③に何をしたいかを記入してください。

本屋大賞 ノミネート作品

全国の書店員が選んだ一番売りたい本「2017 年本屋大賞」のノミネート作品が発表されました。今年は全国の446 書店、書店員564 人の投票によりノミネート作品を選出。大賞は4月11日（火）に発表されます。それまでに全作読んで大賞予想にチャレンジしてみたいかが？



- ノミネート作品はすべて本校図書館にあります。
- * 『i』 西加奈子
 - * 『暗幕のゲルニカ』 原田マハ
 - * 『桜風堂ものがたり』 村山早紀
 - * 『コーヒーが冷めないうちに』 川口俊和
 - * 『コンビニ人間』 村田沙耶香
 - * 『ツバキ文具店』 小川糸
 - * 『罪の声』 塩田武士
 - * 『みかづき』 森絵都
 - * 『蜜蜂と遠雷』 恩田陸
 - * 『夜行』 森見登美彦